

特集：矢作川環境誌としての枝下用水史

## 田んぼの四季

The Four Seasons of a Paddy Field

永島由加里

Yukari NAGASHIMA



写真1 枝下用水受益地の四季を追う。

枝下用水120年史編集委員会で『矢作川資料研究第3集枝下用水120年史資料集その2』について打ち合わせしているとき、目次は、枝下用水を引いている田んぼの1年を追ったらどうだろうか」という話になった。既刊の『矢作川資料研究第2集枝下用水120年史資料集その1』<sup>1)</sup>は目次に「用水の四季」の写真を載せている。田んぼの写真を撮るならば、枝下用水の受益地に住み、撮影地にたびたび足を運ぶことのできる人が良いだろうということになり、筆者が担当することになった。

どこかロケーションの良い場所はないだろうか、枝下用水が少しでも多く映る場所で、定点で撮り続けるならば、目印にできるものがあればなお良い。写真を撮ることが決まってから、我が家から車で出かけるたびに周りに風景を気にかけて走るようになったが、そのような望みを全てかなえ、1枚の写真に収めることのできる場所はなかなか見つからなかった。

写真のスタートになる田植えの季節、なかなかその初めの1枚を決めることができないままに月日が経っていった。田んぼの稲の生長を見るスタートの1枚、その場所をようやく決めたときは、季節が一巡してからだった。



写真2 2011年6月9日。

2011年6月初旬

ようやく決断し、田植えして間もない田んぼの写真の1枚目を撮った。場所は我が家から歩いて行くことのできる距離にした。あまり遠くに設定してしまうと四季の小さな変化を見逃してしまう心配もあり、1年を通して田んぼの四季の姿をとらえるには、車で移動してはその変化に気づかないままに過ぎてしまうと考えた。

撮影の場所を豊田市越戸付近に決めたのは、しかしただ近いというだけではなく、撮影地点が高台になっており、田んぼが見渡せたことが大きかった。気持ちのよい風景が広がっている。田んぼの向こうには名鉄の線路が走り、目印にもなった。そして写真ではわかりにくいかなによりもこの田んぼの後景には矢作川が流れている。枝下用水は矢作川から取水している。一目で気に入った場所であったが、もうひとつ撮影場所の決め手になった理由がある。それは高台から見える範囲の田んぼに休耕田があったことだった。すべての田んぼに稲が植わっている風景の方がきっと美しいだろう。しかし実際にはそのような場所を見つける方が困難である。麦もあれば、休耕田もある。この風景そのものが、まさしく現在の農業の姿ではないだろうか。



写真3 2011年6月29日.

最初の写真を撮ってから、20日目。それほど日が経っていないというのに、稲の成長は驚くほど早かった。そのため、毎日田んぼを見ていないと気になって仕方がない。ふと田んぼを見ると、もうこんなに伸びたのかと思ひ、のんびり散歩がてら田んぼを見てこようとは言っていられないほどの生長ぶりであった。



写真4 2011年7月11日.

約1か月が経った7月中旬の稲はまるで「どうだ」とも言っているかのように、ピンと背筋を伸ばして青々としていた。いかにも、夏の風景だ。稲の青い色に惹きつけられた。朝早ければ、しずくをそのしなやかな葉にまもっていて、それは美しいものだ。早起きをしてこの田んぼの周辺を散歩し、清々しい気分を味わった。



写真5 2011年8月22日.

8月中旬。稲の穂が付き始める。ところどころに見える今年の穂が、離れた場所からでも確認できるようになった。伸びた稲もぎっしりと並んでいる。機械植えであるから、びしっと整列している行儀のよい稲たちである。穂が付き始めてからは、穂の成り具合をよくよく見えていないといけない。いつになったら色が変わり始めるのだろうか、穂のふくらみ具合もその変化をとらえたい。今年こそは1年を通していい写真を撮り続けたいと思って眺め続けた。



写真6 2011年9月5日台風前.

9月初旬。稲の穂が少しずつ頭を下げてきている。まだ収穫には早いのだが、この日は台風の前日であった。もしかしたら台風でこの稲が倒されてしまうのではないかと思ひ、その前に撮影にでかけた。今までずっと見てきた田んぼだ。できればなんとか持ちこたえてほしいと願った。しかし、これでたとえ稲が倒れてしまったとしても、それは稲作の1年のありのままの姿ではないかと考えを改める。そのままの1年を残すのだと思ひながらも、倒れないでいてほしいという思ひがいつのまにか生

まれている。そのことが、1年天塩をかけて稲を育てる農業者の思いにつながる気がした。



写真7 2011年9月6日台風後。

台風一過、いつもより早く起きて田んぼへ向かった。心配していた稲は倒れることなく、まだ残る台風の風に吹かれていたが、しなやかにその茎を風にまかせ揺らしていた。意外と強いものだ。それでも枝下用水受益地全体で考えれば、ここがたまたま倒れなかつただけで、どこかで倒れてしまった稲もあることだろう。これまでにも何度もそんな田んぼを見てきた。ぺたりと地面に張り付いた稲、田んぼに水が入り込み、水についてしまった稲、倒れてしまった稲を交互に立たせて起こした田んぼも見たことがあった。筆者が農業をしていないので、それで稲が大丈夫なのかどうかも分からないが、農家の人たちが稲を起こす気持ちが少しわかる気がした。



写真8 2011年9月22日。

9月下旬、そろそろ稲刈りの頃だろうと、毎日毎日田んぼに通った。「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という句はあまりにも有名だが、その句が生まれた背景には、まるで頭を下げているような、ずっしりとした実りの重さがあったはずである。まさにこの句が生まれる稲穂の様子が目の前にあった。

しかし、この句が生まれた頃と現在とでは、その実りの季節がずれているのではないだろうか。枝下用水の聞き取り調査で、「11月に凍った田んぼに素足で入り、手で稲刈りをしたんだよ」と聞いた<sup>2)</sup>。これが昭和30年代の話であったことを考えると、50年の間に米の品種が変わり、稲刈りの時期がだいぶ変わったことがわかる。それは撮影し続けた田んぼが早稲の稲だからというわけではない。早稲であればもう稲刈りは済んでしまっている。だというのに、もう今か今かと稲刈りを待つばかりの田である。農業技術の発展により、田畑とともにあった季節感も大きく変わってしまっていることを改めて知った。



写真9 2011年10月10日ハザ架け.

10月初旬、とうとう稲刈りが行われた。稲刈りをしている写真そのものは残念ながら撮ることができなかったが、田んぼではハザ架けがきれいに並んでいた。現在では機械化によって刈り入れから脱穀までが同時に行われ、藁もそのまま田に細かく刻まれて残されていくのが一般的なようである。そのためハザ架けはほとんどみられなくなってしまった風景なのだという。「ハザ架けの写真撮った」と話したら、農家の方から「珍しい写真が撮れてよかったね」と言われて驚いた。たまたまこの場所を選んだのだが、それは運がよかったということだろうか。

この日は夕方に田んぼに出かけたのだが、撮影をしていると、ちょうどハザ架けの向こう側を赤い名鉄電車が行って行った。なんと秋らしい風景で、何度もシャッターを押した。線路は引かれた時から位置を変えることなく、この地を走り続けている。しかし、その周辺の風景は大きく変わったことだろう。変わらないのは線路だけだ。いつかこの田んぼもハザ架けを辞めてしまうのだろうか。あるいは田んぼ自体、無くなってしまうのだろうか。

この田んぼの場所は、153号線のバイパスが通る予定になっているのだという。そのころ、田んぼの持ち主は何を思い、どう決断するのであろうか。時代の流れ、高齢化、農業そのものがその将来を危ぶまれている時代である。



写真10 2011年12月26日雪景色.

最後の1枚は雪景色である。2011年の暮、大雪が降った。田んぼの四季の写真の終わりにちょうどいい1枚になった。子どもの頃、もっと雪の降る日はあり、積もる量もあったように思う。雪だるまを作って遊んだ記憶も何度かあるが、今は積もることも珍しくなってしまった。だとしたら、この雪景色の写真は田んぼの日常風景とは言えないのかもしれない。しかし、2011年はこんなに雪が降った。

何気ない田んぼの四季の写真の中に、消えていくもの、残っていくものがあるだろう。それが良いとか悪いということではないが、まだ、いまなら私たち自身が残せるものを、残していくことも大切なかもしれないと思う。

この先、農業の技術がどのように発展していくのか、機械化はどのように進むのかは未知数であるが、2011年、この1年を通して「田んぼの四季」のその風景を見守り、記録を撮り続けた。何年後かにこのページを開いた時、どのような思いでこの風景を見ることができているのか、どう変わるか、変わらないかと、複雑な気持ちもあるが、楽しみでもある。

## 注

- 1) 枝下用水120年史編集委員会編(2011) 矢作川資料研究第2集枝下用水120年史資料集その1, 豊田土地改良区・豊田市矢作川研究所, 愛知.
- 2) 2011年7月14日の鈴木寿伸氏への聞き取りによる.

枝下用水120年史編集委員会：  
〒470-0331 豊田市平戸橋町波岩83-1  
豊田土地改良区水源管理事務所内